

## 第6章 インターンシップにおける事前指導・事後指導の影響

### 1. 普及してきたインターンシップ

就業体験活動（以下、インターンシップ）は、活動前までに学んできたことを働く場どのように活用できるのかを確認、実体験することができる重要な機会の一つである。また、それらの経験からその後の進路を考えるきっかけとしても意義がある活動であり、ひいては形成してきた職業観・勤労観や態度を更に変容・成長させる機会になりうるという意味でも、大切な活動として位置付けられる。

高等学校におけるインターンシップは、平成17年度の時点では59.3%の公立高等学校（全日制・定時制）で実施されていたが、平成26年度の時点で実施率は79.3%に上昇しており、普及してきている<sup>(注1)</sup>。

本報告書で分析に用いている「変容調査」に関しても、インターンシップの経験がある生徒の方が基礎的・汎用的能力が高いという結果が報告されている<sup>(注2)</sup>。

一方で、このような、大規模調査に基づいたインターンシップの効果が示される以前から、インターンシップを充実させるという目的に照らして、事前指導・事後指導の重要性が繰り返し指摘されてきた<sup>(注3)</sup>。これらの指摘は、インターンシップ経験が基礎的・汎用的能力に影響することが明らかになったからこそ、以前より重要性が増している。

そこで、本章では、基礎的・汎用的能力へのインターンシップの影響に対して、事前指導・事後指導がどのように関わりを持ちうるのかを検討する。具体的には、学校経由で実施されたインターンシップについて、事前指導・事後指導の有無別に、基礎的・汎用的能力の伸びに関して分析する<sup>(注4)</sup>。

分析に用いるデータは、「変容調査」の生徒調査のうち第4回及び第6回調査と、学校調査の第3回分である。生徒調査の第4回調査は第2学年の後半で、第6回調査は第3学年の後半で実施されている。また、学校調査の第3回は第3学年における実施状況を尋ねたものである。分析の対象を第3学年に焦点を絞る理由は、事前指導・事後指導に関する項目が利用できるのが第3回調査に限られるためである。本章では、学校として実施したインターンシップについて着目するため、インターンシップを実施していない学校においてインターンシップに行ったと回答した（すなわち、学校とは関係なく自発的にインターンシップを経験したと推定される）生徒は除外して分析する。

生徒調査には、基礎的・汎用的能力に関する項目が四つの領域（人間関係形成・社会形成能力、自己理解・自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力）それぞれに6項目が用意されており、各項目について四件法で尋ねている。本章では、この回答をまとめた合計得点を用いる（したがって、各能力について6～24点の範囲でいずれかの数値を取る）。学校調査からは、インターンシップに関する変数、及び、事前指導・事後指導に関する変数を用いる。なお、変数に関する詳細は参考資料欄（66-68ページ）に掲載している。

事前指導・事後指導の実施の別で、インターンシップが持つ基礎的・汎用的能力への影響に違いが見られるのであろうか。

## 2. インターンシップの実施状況と基礎的・汎用的能力の推移

「変容調査」の学校向け第3回調査が実施された時点では、第3学年においてインターンシップを実施している学校は33校で、全体の15.7%を占める（図1）。実施している学校の中で、インターンシップを体験したと回答した生徒の割合は、全体の14.2%（748名）である。ここからは、可能なかぎり比較する際の条件を合わせるため、第1学年及び第2学年でインターンシップを経験したことがある生徒を除外し、第3学年で初めてインターンシップを経験した生徒と、第3学年でもインターンシップを経験することがなかった生徒（すなわち、3年間で一度もインターンシップを経験しなかった生徒）のみに焦点を絞る。なお、第3学年でインターンシップを経験した生徒は485人、経験がない生徒は3,978人である（図2）（注5）。

これらの実施状況を踏まえ、体験したことがある生徒とない生徒の基礎的・汎用的能力の推移を示すと、インターンシップ経験がある生徒の方がいない生徒よりも基礎的・汎用的能力の数値が高くなったり、差を縮めたりといった特徴を見て取れる（図3）。

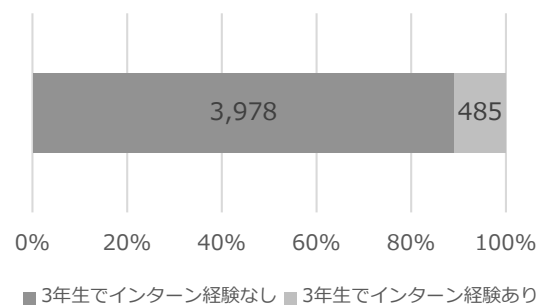
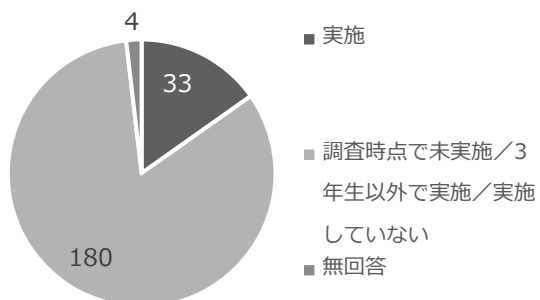


図1 第3学年でのインターンシップ実施状況 (N=217)

図2 第3学年でインターンを経験した生徒の割合 (N=4,463)

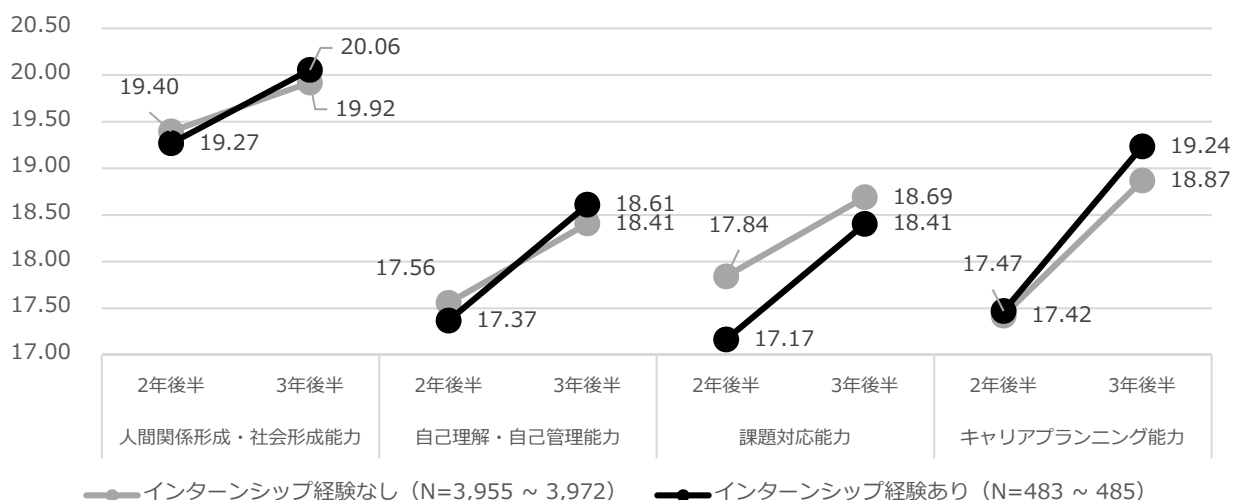


図3 インターンシップ経験の有無別に見た基礎的・汎用的能力

### 3. 事前指導・事後指導の影響

他方で、事前指導・事後指導について実施状況を見てみると、「変容調査」が尋ねている九つの項目のうち、第3学年でインターンシップを実施している学校では、事前指導については体験活動の目的を確認する指導が、事後指導については報告書・レポートの作成が、多く行われている指導内容であった（図4）。

事前指導については、「就業体験の目的を確認するための指導」が最も多く、61.8%であった。「マナー指導（礼儀作法や挨拶の方法の指導等）」が47.1%、「就業体験の内容に関する事前の調べ学習」32.4%と続く。

事後指導については、「報告書・レポートの作成」が最も多く、70.6%であった。「訪問・受入先に対するお礼状の作成」が32.4%、「就業体験に関する内容での個人面談・個人指導」が17.6%、「就業体験に関連した成果発表報告会」が11.8%と続く。なお、「就業体験と教科の学習内容とを結び付けた指導」及び「その他の事前・事後指導」は0.0%であった。

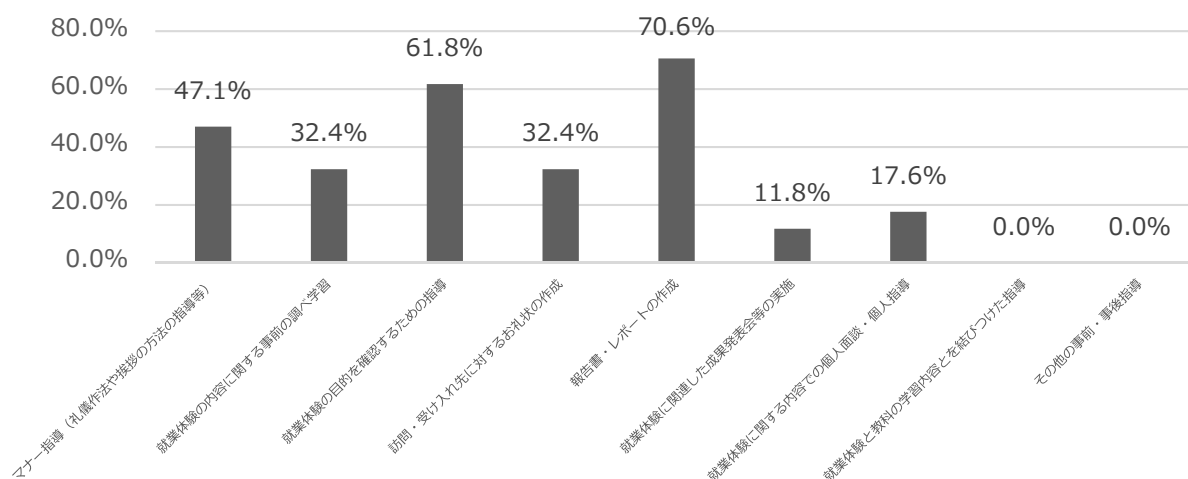


図4 事前指導・事後指導の実施状況（第3学年でインターンを実施している学校）（N=33）

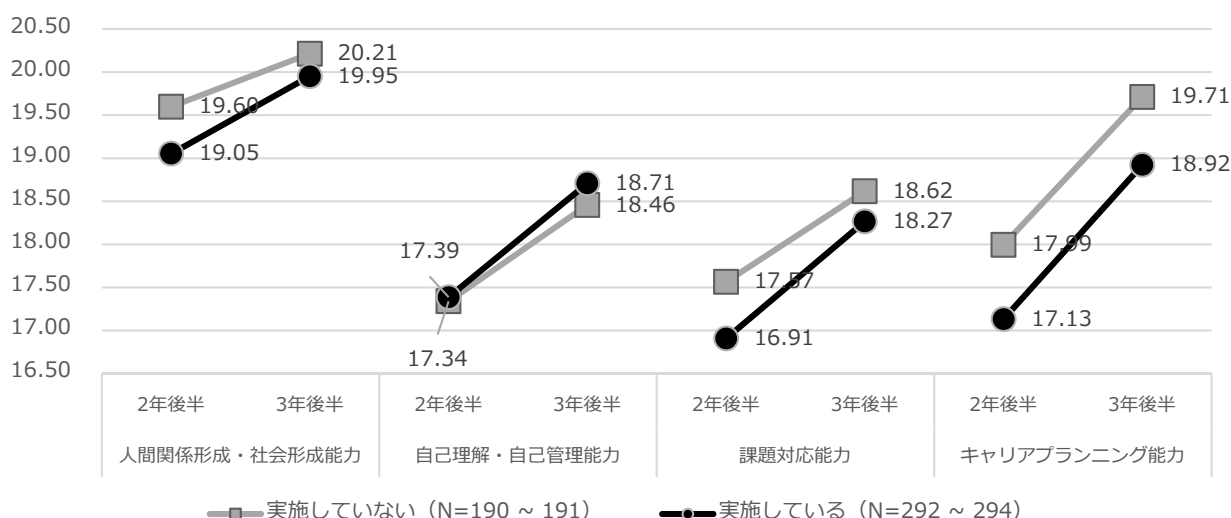


図5 マナー指導（礼儀作法や挨拶の方法の指導等）の実施別に見た基礎的・汎用的能力の推移

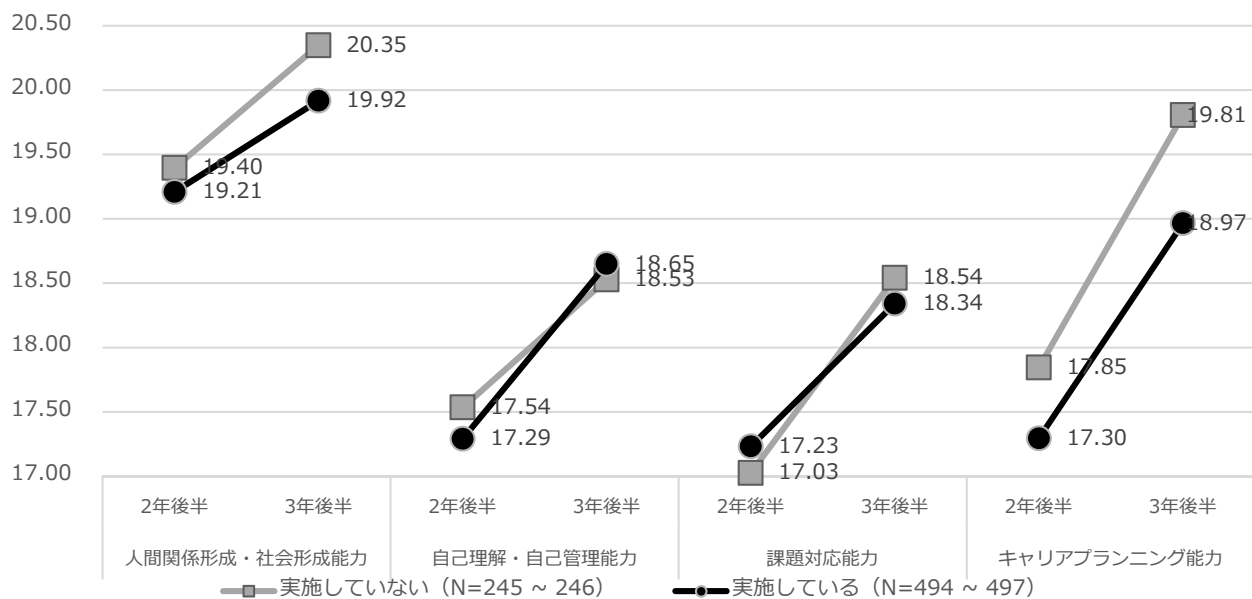


図6 就業体験の目的を確認するための指導の実施別に見た基礎的・汎用的能力の推移

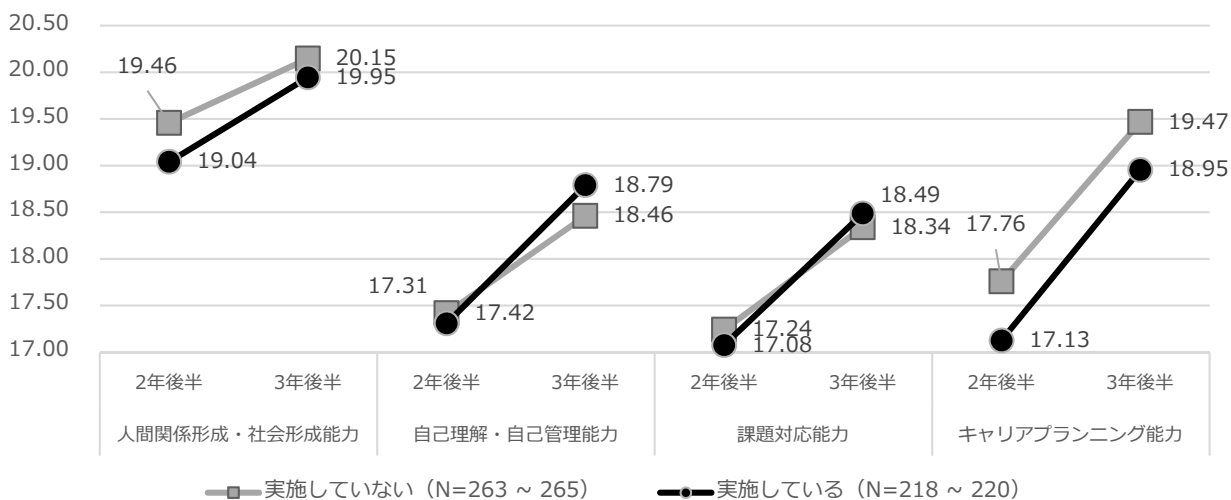


図7 訪問・受入先に対するお礼状の作成の実施別に見た基礎的・汎用的能力の推移

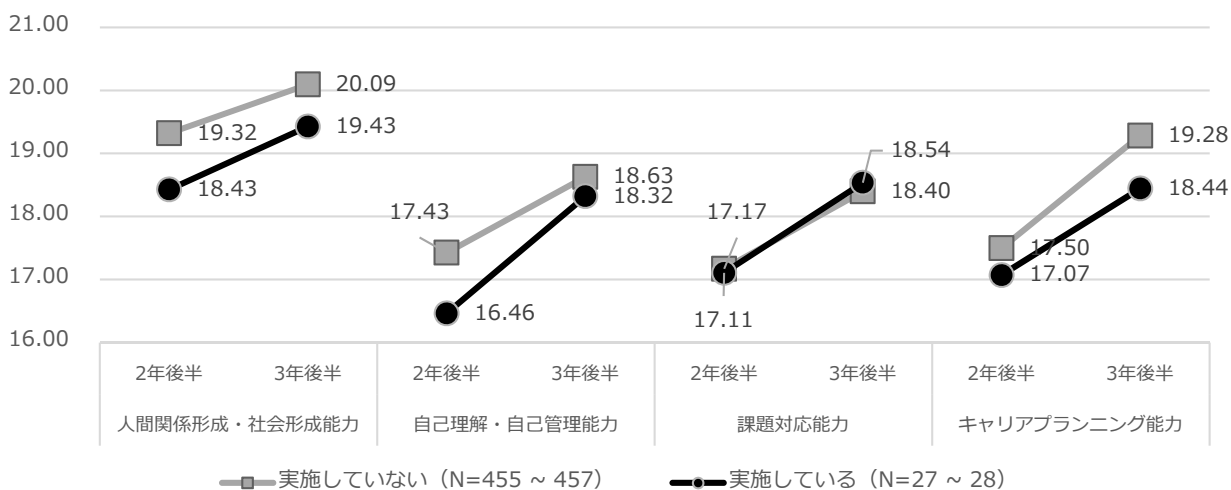


図8 就業体験に関連した成果発表会等の実施別に見た基礎的・汎用的能力の推移

この状況を踏まえ、学校における事前指導・事後指導の実施状況と生徒のインターンシップ経験の有無を組み合わせ、基礎的・汎用的能力の伸びを示したのが図5から図8である。なお、紙幅の関係から事前指導、事後指導から二つずつ取り上げるにとどめているが、取り上げていないものについては参考資料欄（87-89 ページ）に掲載している。

マナー指導の実施別に見てみると（図5）、マナー指導を実施していない学校でインターンシップを経験している生徒の方が全般的に基礎的・汎用的能力の水準が高いが、2年生後半から3年生後半にかけての基礎的・汎用的能力の推移に着目すると、人間関係形成・社会形成能力や課題対応能力に関しては若干であるが差を縮めており、自己理解・自己管理能力については同じく若干であるが差を広げている。

就業体験の目的確認の実施別に見てみると（図6）、自己理解・自己管理能力については、実施している学校でインターンシップを経験している生徒の方がより高い数値を示すようになる。

訪問・受入先に対するお礼状の作成の実施別に見てみると（図7）、マナー指導に同じく、礼状作成を実施していない学校でインターンシップを経験している生徒の方が基礎的・汎用的能力の水準が高いが、基礎的・汎用的能力の推移に着目すると、こちらもマナー指導と同様に、人間関係形成・社会形成能力に関しては若干であるが差を縮めており、自己理解・自己管理能力や課題対応能力についても若干ではあるが、より伸びている。

成果発表会の実施別に見てみると（図8）、こちらも就業体験の目的確認と同様に、自己理解・自己管理能力については伸びが見られる。

#### 4. インターンシップが持つ可能性と今後の課題

大幅な変化とは言えないものの、インターンシップにおいて事前指導・事後指導の実施が基礎的・汎用的能力の伸長に対して関連を持つ様子がうかがわれた。

今回の数値を見る際に、事前指導・事後指導を実施していない方が基礎的・汎用的能力の平均値は高かったとしても、当該の指導をしない方が良いことを意味するわけではないことには留意が必要である。紙幅の関係から詳細は割愛するが、各種の事前・事後指導は、キャリア教育の学校・学年の目標を設定している学校で実施されている傾向にある。また、進学率が高くない、すなわち、普通科であっても就職が生徒にとっては身近な進路である学校において、事前・事後指導が実施されている傾向にある。

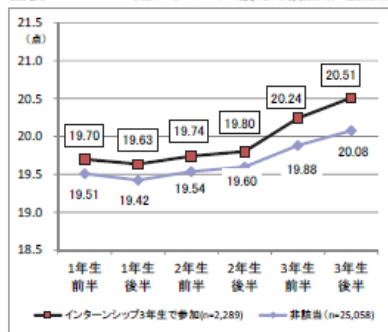
これは何を意味するかといえば、基礎的・汎用的能力の水準の高低そのものよりも、その事前指導・事後がその学校の生徒にとって必要な内容であり、かつ変容・成長につながっているかという視点がこのようなデータを眺める上でより重要である、ということである。マナー指導やお礼状の作成も、体験活動に参加する上でも、生徒の将来にとっても、それ自体に意義がある指導内容である。その学校の生徒にとって必要なならば実施すべきであるし、かつ、それが生徒にとって意義がある内容になっているかという点に着目した方が、より有意義な活動内容になっていくことであろう。この観点から活動を点検したときには、既存の取組を充実させる手掛かりのみならず、既存の取組内容を精選、重点化していく手掛かりも併せて得られていくものと考えられる。

大規模調査のデータから、事前指導・事後指導が影響力を有している可能性はかいま見られた。これを踏まえて本章では、事前指導、インターンシップ、事後指導をどのように

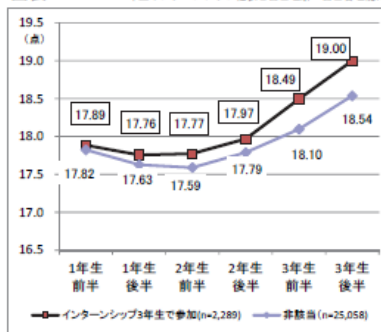
相互に関連付ければより有効な教育活動になるかについて、各校にとって必要な活動なのかという視点から改めて点検し、その結果に基づいて精選や改善を図るといった観点を提案したい。

- (注1) 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター『職場体験・インターンシップ実施状況等調査』(各年度版)を参照。
- (注2) 『高等学校普通科におけるキャリア教育の実践と生徒の変容の相関関係に関する調査研究』平成26年度報告書(46ページ)

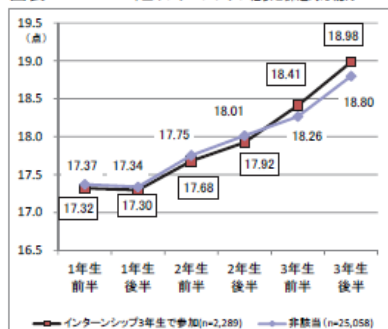
図表 3-6-18 3年生インターンシップ経験と人間関係形成・社会形成能力



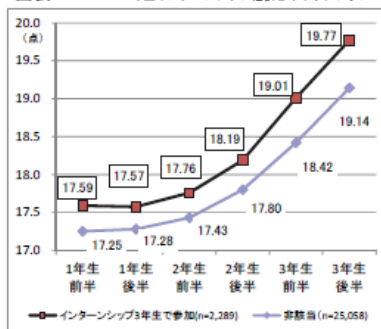
図表 3-6-19 3年生インターンシップ経験と自己理解・自己管理能力



図表 3-6-20 3年生インターンシップ経験と課題対応能力



図表 3-6-21 3年生インターンシップ経験とキャリアプランニング能力



- (注3) 例えば『高等学校キャリア教育の手引き』(文部科学省2011)ではインターンシップ充実のポイントとして「十分な事前指導・事後指導を実施する」(115ページ)ことを挙げている。事前指導・事後指導を十分に実施しているホームルーム担任の方がキャリア教育の成果を実感する割合が高いという調査結果もある(国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター2013『「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査」パンフレットー学習意欲の向上を促すキャリア教育についてー』)。
- (注4) 『変容調査報告書』でも事前指導・事後指導と基礎的・汎用的能力の関連は検討しているが(51ページ)、事前指導の一つである事前の調べ学習の実施が基礎的・汎用的能力に対して直接的に影響を及ぼすかを検討しているため、インターンシップと組み合わせた分析にも意義があるだろう。
- (注5) 未回答等で732人が分析から除外されている。